

平成27年度

第18回「ちゅうでん児童文学賞」贈呈式のご報告

本年度は、賞創設時から選考委員としてご尽力いただいております故・今江祥智氏（児童文学作家）と故・長田弘氏（詩人）に代わり、斉藤洋氏（児童文学作家・ドイツ文学者）と富安陽子氏（児童文学作家）を新たに選考委員にお迎えしました。また、鷲田清一氏（哲学者）には引き続き選考委員をお引き受けいただくことができ、御三方で初めての選考となりました。

そうしたなか、8月末の締切までに届いた作品は188編。応募者の方々をみてみますと、例年同様に男女比はほぼ半分半分、年齢層は40～60代中心でしたが、特筆すべきなのは、過去最年長となる90歳の大ベテランの方がおみえになったこと。また、地域別では、北海道にお住まいの方が12人と昨年の二倍もいらっしまったことも印象的でした。

締切後は、約半年間をかけた予備選考を経て、本年2月に最終選考を行い、大賞1編、優秀賞2編、計3編の作品が受賞となりました。なお、残念ながら、本年度は奨励賞の該当作品はありませんでした。

平成28年3月6日、名鉄ニューグランドホテル（名古屋市）にて贈呈式・記念講演会を開催いたしました。その時の様子を、以下、簡単にご紹介させていただきます。

大賞	『とうちゃんと僕、そしてユーレイババちゃん』 藤澤 ともち さん
優秀賞	『ラブベリーズに会いに行こう』 フカミ レン さん
	『廻りの神』 瀬川 青加 さん



受賞者の皆さま

（左から、優秀賞：瀬川さん、大賞：藤澤さん、優秀賞：フカミさん）

「第 18 回 ちゅうでん児童文学賞」贈呈式

【開催日：平成 28 年 3 月 6 日（日）】

暖かな陽気だったこの日、およそ 210 名の御来場者の皆さまと共に、「第 18 回ちゅうでん児童文学賞」の贈呈式と記念講演会を開催いたしました。

まずは、理事長の佐々木敏春からご挨拶させていただきました。



早いもので、当文学賞も今年度で第 18 回目を迎えます。ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、賞の創設時から昨年度まで選考委員としてご尽力いただいております。児童文学作家の今江祥智先生が昨年の 3 月に、また詩人の長田弘先生が 5 月に、相次いでご逝去されました。この場をお借りしまして、お二人のご冥福をお祈り申しあげますとともに、長年に渡ります当文学賞へのご功績に対しまして、改めて御礼を申しあげます。

お二人の御後任は、児童文学の世界で大変ご活躍されている斉藤洋先生と富安陽子先生がお引き受けくださいました。また、鷺田清一先生には引き続き選考委員としてご協力いただくことができ、心から感謝を申し上げる次第でございます。

私ども「ちゅうでん児童文学賞」は、広く優れた書き手を発掘するということを目的の一つとしております。そして同時に、出版作品を通して、21 世紀の社会を担う子どもたちの人間性や感受性の向上を目指しているものでもあります。

昨今、昔に比べて、社会性が未熟なまま、あるいは人の痛みが分からないまま大人になっていく子どもが多いのではないかと感ずることがございます。かつては、家庭や地域といった日常生活のいたるところに情操教育の現場がありました。しかし今は、プライバシーの延長ですとか、情報社会の進展とがあいまって、人と向き合う時の緊張感、^{おもんぼか}慮り、そうした人間関係が非常に希薄で、表層的なものになってしまっている場面に触れることも少なくないように思います。

情報があふれているこの時代、知ることは非常に簡単で、子どもたちでも知識をどんどん増やすことができます。しかし、考えなくても簡単に答えが出るがゆえに、その知識を使い、知恵を伸ばすことが大変難しくなっているのではないのでしょうか。

「知識」と「知恵」は別ものです。自らの人生を豊かなものにするために欠かせないのは知恵であり、周辺の人々とコミュニケーションをとっていくためにも、困難を乗り越えていくためにも、必要なのは、知識ではなく知恵なのだと、痛感いたします。

子どもたちには、まずは多くの考えや価値観を知ってもらい、その中で何を選択すればいいかを知恵をはたらかせて考え、自らの人生を切り開いていく力を付けて欲しい、私は切に願います。

そういった意味でも、児童文学には、いつの時代にも欠かすことのできない大きな役割があると考えています。本は、その面白さ、楽しさを知り、魅力を味わうことができれば、人生という旅を豊かにする糧になると思うからです。この「ちゅうでん児童文学賞」が、そうした児童文学の発展に少しでもお役に立つことができれば、これ以上の喜びはございません。

最後になりますが、私ども「ちゅうでん児童文学賞」に携わっていただいている多くの皆さま、そして、ここにご来場いただきました皆さま方のますますのご活躍とご健勝をお祈りいたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

次に、選考委員の先生方から、ご講評をいただきました。

<齊藤 洋 先生>



私は声が大きいので、マイクはなしでお話しますね（笑）

受賞された皆さま、どうもおめでとうございます。齊藤でございます。

今年は『ルドルフとイッパイアッテナ』が映画になるので、よろしくお願いいたします（笑）

最終選考に残った何点かを読ませていただいたわけですが、選評については特に申し上げることはないんですが、最優秀賞をとった藤澤さんの作品については――

物語の始まりから登場する「とうちゃん」というのは、父親かと思ったのですが、父親ではないんですね。多くの作品がそうであるように、おそらく変わった父親が出てくるのだらうなあと思って読み始めましたら、そうではなくて、すぐにどんでん返しがありました。そして、文章もお上手で、誰かプロの作家の方が副賞を目当てに応募したのかな、なんて思ったりしたわけです。だから、ちゅうでんさんに聞いてみたんですけど、そうではないということで、でも、それくらいよかったですと思いました。

今日はおめでとうございます。これからも頑張ってください。

齊藤先生には贈呈式後の記念講演会でたっぷりとお話をお聞かせいただきました。

◇◇講演テーマ◇◇

『こどもが読んでもおもしろく、おとなが読んでもおもしろく』



<富安 陽子 先生>



では、私も声が大きいので、マイクなしで (笑)

どうも、おめでとうございます。

私は今年度から選考に関わらせていただいたのですが、今回の選考は本当にスムーズでした。

藤澤さんの作品については、全員一致で面白いということで、誰も異存がありませんでした。

親の再婚という大人の事情と、その事情の前で揺れ動く子どもたちの心情が、本当に丁寧に描かれていて、温かくて、ユーモアたっぷり、読み終わった後に「面白い！」と素直に言える作品だと思いました。

それから、フカミさんの作品も私は大好きでした。ご当地アイドルのおっかけをする人たちが登場するんですけど、おっかけの人たちの日常がおかしくて。おっかけをしている人にしか分からない仁義とかプライドがあって、それに否応なく巻き込まれていく主人公もおかしくて。とても楽しく読ませていただきました。

この二作品はどちらもリアリズムの作品で、それぞれ、親の再婚とか、震災後世代と忘れられたものを繋ぐとかいうテーマがあるんですけども、そのテーマを決して、作品中で声高に言い募ることなく、物語として面白く成立させているところが、すごく素敵だなと思いました。

瀬川さんの作品は、ファンタジーの作品だったんですけども、面白いファンタジー作品を待ち望むのは私だけではなく、児童文学の読者全員の切なる願いではいかと思います。そのなかで、これだけの長いものを書こう、そして書き上げて下さったこと、その結果受賞となったことが、とてもよかったなと思いました。クライマックスがもう少し整理されるといいなと思ったんですけども、この作品が力作であることは間違いなしだと思います。

どうぞこれからも、よりいっそうのご活躍をお祈りしております。

本日はおめでとうございます。

<鷺田 清一 先生>



鷺田でございます。一人くらいマイクを使わないと。せっかく準備して下さったので (笑)

昨年一昨年と、今江先生と長田先生と審査させていただきましたが、実は、長田さんは私が二十歳くらいの時から憧れていた人で、この審査で初めて、親しくお話させていただくことが

できました。その長田さんの文章に、『見えてはいるが、誰も見ていないものを見えるようにするのが、詩だ』という言葉があります。

この言葉は私自身が勉強している哲学の精神とそのまま通じるものだと思っていて、私が若いころに初めて一般の雑誌に哲学の論文を書かせていただいた時、冒頭のエピグラフとして掲げさせていただきました。そういう意味で、この言葉は私の哲学の出発点でした。

去年までは、今江さんという児童文学作家と、長田さんという詩人と、そして哲学を勉強してる私がトリオで審査させていただいたのですが、哲学、詩のみならず、児童文学にも、この言葉がそのまま当てはまるのではないかなと思っています。どういうことかと言いますと、児童文学というのは大人が書くものですが、大人が自分がもうなくしてしまったもの、見果ててしまった夢、それを子どもの世界にかぶせてしまうだとか、子どもの世界を美しく描いてしまうというのではなくて、また逆に、子どもの要求や言い分というものを、なんでもかんでも鵜呑みにする、受け入れるというものでもなくて、子ども自身はもちろん、大人ですら気づいていない、子どもであることの可能性というものを掘み出す、それが児童文学なんじゃないだろうか、と私は思っています。だから、そういった子どもであることの可能性、また誰も見ていない可能性、見えているのに見ていない可能性を探るために、子どもの魂の、わけの分からないようなもの、ざわめきに、きちんと「耳を澄ます」ことから始めるしかない、そんなことを、長田さんの詩の言葉から学んだつもりでいます。

「耳を澄ます」ということですが、ドイツ語で「理性・知恵」という言葉を「^{フェアヌンフト}Vernunft」というのですが、これは実は(英語なら listen にあたる)「聞き取る」という動詞からきているんですね。フランス語で「知性」を意味する「^{オントンドモン}entendement」という語も「聞く」を意味する^{オントンドル}entendreという動詞からきています。よく考えると、日本語でも、「聡い」という言葉は「耳」偏からなっています。

「聞く」ことが「賢さ」の基本にある。いろんなメガネをかけてモノを見るのではなく、一度、目をつむって、宇宙の、あるいは人々の、子どもの、定かでないざわめきに耳を傾けて、耳を澄ませて、そしてそれを聞き分ける、というのが、本当の賢さなんじゃないだろうか、と思うのです。

「聞く」といえば、お酒の美味しさを味わい分けるのも「酒を聞く」と言いますし、宮大工さんが柱になる木を選ぶときも「木を聞く」という言い方がなされます。中国ではお医者さんが診察をする時に「体を聞く」と表現するらしいですね。長田さんの詩も、きっと、「聞く」ということの大切さを教えてくれているのだと改めて感じています。

全然、講評になっておりませんが (笑)、またこれから児童文学を書こうとなさる方に少しでもヒントになればと思ってお話しさせていただきました。

本日はお三人、ほんとうにおめでとうでございます。

次に、受賞者の皆さまからもお言葉をいただきました。

【大賞】 藤澤 ともち さん 作品名『とうちゃんと僕、そしてユーレイババちゃん』



ただいまご紹介にあずかりました藤澤と申します。

本日はこのような素晴らしい賞をいただき、とても嬉しく思っております。

受賞作は、家族に隠れて一人でコソコソと書きました。この度の受賞をきっかけに、晴れて家族にカミングアウトしてきました。

私は漫画家をしております。漫画家と申しましても、漫画界の隅っこの方にひっそりという存在なのですが、漫画を描いているくせに、読むのは小説ばかりでありまして、そのうちに自分でも書いてみたいと思うようになりました。

児童文学を選んだのは、もともと好きだということもありますが、趣味で小学校の図書ボランティアとして読み聞かせをしていることもあります。

目をキラキラと輝かせながら身を乗り出すようにして話を聞いてくれる子どもたちの姿を近くで見ているうちに、自分の書いたものでこの子たちの目を輝かせてみたい、自分の書いたものをこの子たちに届けたいと思うようになりました。

とは申しましても、小説を書くことに関してはまだまだ初心者です。情けなくなるような初歩的なことに悩みながらも、形にして書き上げた作品です。それでも私の気持ちをたくさん込めて書きました。

その作品が今回このような評価をいただいて、とても嬉しく思っております。審査員の皆さま方、そしてこの賞に関わってくださった皆さま方、本当にありがとうございました。

【優秀賞】 フカミ レン さん 作品名『ラブベリーズに会いに行こう』



この度、このような賞をいただき、この賞に関わった関係者の皆さま、先生方、誠にありがとうございました。

賞をいただいた『ラブベリーズに会いに行こう』という作品なのですが、神戸に住む高校生の女の子が、図らずも、「ラブベリーズ」というアイドルに会いに行かなくてはならなくなる話なのですが、私もお恥ずかしながら、アイドルファンで、神戸で毎週アイドルを追っかけています。この作品は、すでに2年くらい前に書き上げた作品で、2年前、とあるアイドルに本当に感動して、どこかに出すアテもなく書き始めたものです。毎週のように神戸のいろいろな都市でライブやイベントが行われるわけですが、行った先々に、神戸の震災の爪痕やら記念碑が立っており、非常に感慨深いものがあります。

私の子どもは、もう中学生と小学生なのですが、震災の日には毎年、学校からいろんな行事に出掛け行っていて、たまに、テレビの中継に写ったりするんですが、非常に嫌そうな顔で合唱団の歌を聴いたりするのを見ると、この子たちにとって震災というのは、我々にとっての戦争の話みたいなものなのかもしれないと思ったりします。それで、神戸で活躍しているアイドルの女の子と震災をひっつけて、ちょっとでも今の子どもたちに震災の事を分かってもらえたらと、この話を書きました。

大賞にならなかったのが本になることはないと思いますが、いつか皆さまに読んでいただけたらなあと思います。この度は本当にありがとうございました。

【優秀賞】瀬川 青加 さん 作品名『廻りの神』



本日は誠にありがとうございます。素晴らしい賞をいただき、とても光栄です。

私が物語を書き始めたのは、小学 1 年生でした。国語の授業で人生初の作文を書いた時です。先生の説明を上の方で聞いているような子どもで、事実とは違うことばかり面白おかしく書きました。

創作です。でもその作文は、なぜか先生に褒められ、学校の掲示板に貼り出されました。どうやら私には、うそつきの才能があったようです。もちろん、先生にはお見通しです。その証拠に、先生が他の学校に異動になってお別れする時に、クラスメイト全員にそれぞれ違ったプレゼントを送ってくれたのですが、私にはペンを下さり、「これでお話を書いてね」とおっしゃったのです。

その言葉を胸に今回書いたお話は、『廻りの神』といます。一人の娘と、桜の木の神の物語です。アイデアは、眠っている時に見た夢からもらいました。

真っ暗な宇宙に浮かぶ星に一本だけ桜の木が生えていて、そのそばで娘が歌っている、というものです。いざ物語にしてみると、だいぶ雰囲気が変わりました。いつか皆さまにも読んでいただけるように、これからも努力してまいります。

長年、様々な賞に応募してきて、今回が初めての受賞です。財団の皆さま、選考委員の皆さま、私を励まして下さった皆さま、家族、先生に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

大賞を受賞した『とうちゃんと僕、そしてユーレイババちゃん』は、これから出版に向けて準備を進めていきます。

誰の心にも届く一冊になることを、スタッフ一同、心より願っております。

2016 年 4 月 吉日

公益財団法人ちゅうでん教育振興財団